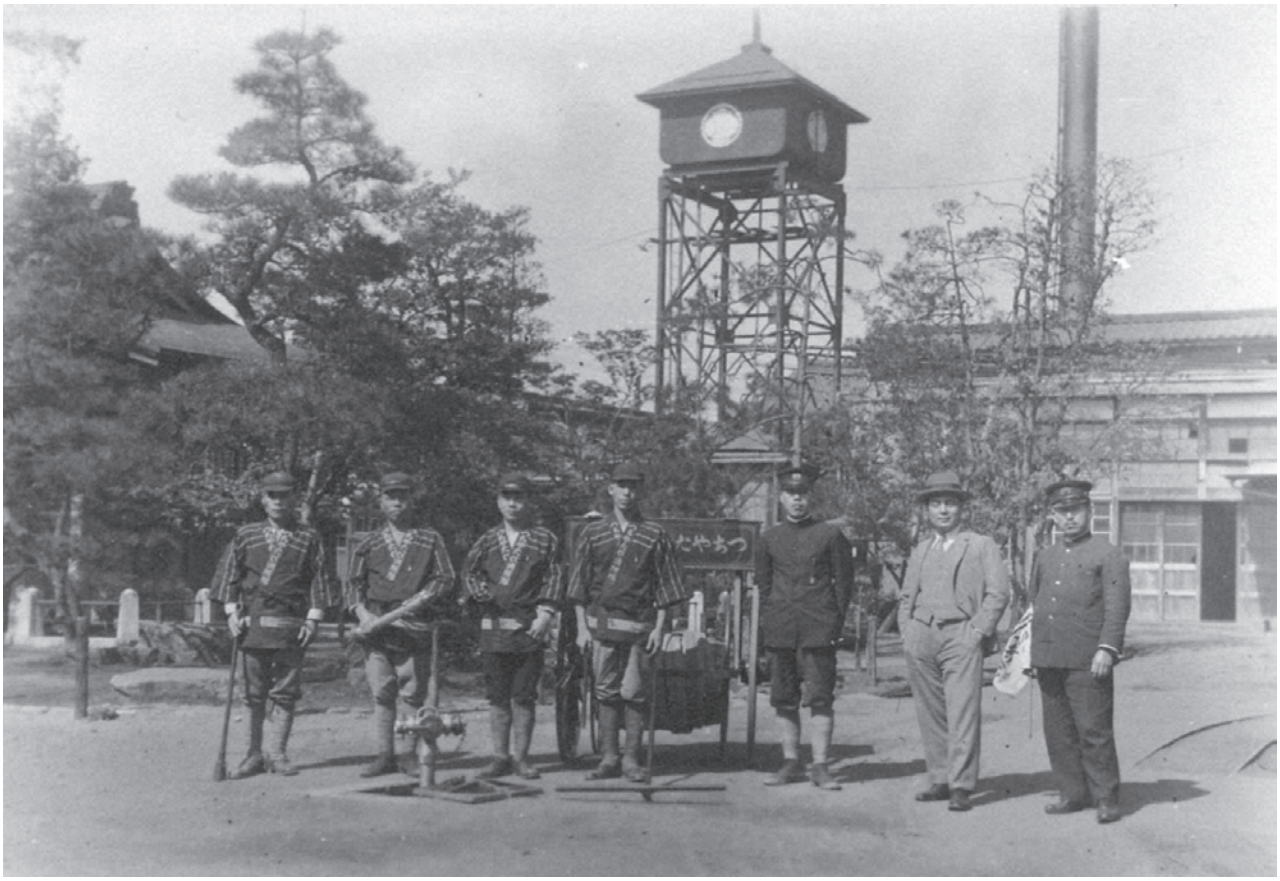
ドイツさんと久留米 第７回

ドイツさんはどこにお勤め？



明治時代後期には、九州市場の地下足袋シェア５割を誇った「つちやたび合名会社」（以下、写真は全て久留米市教育委員会所蔵）

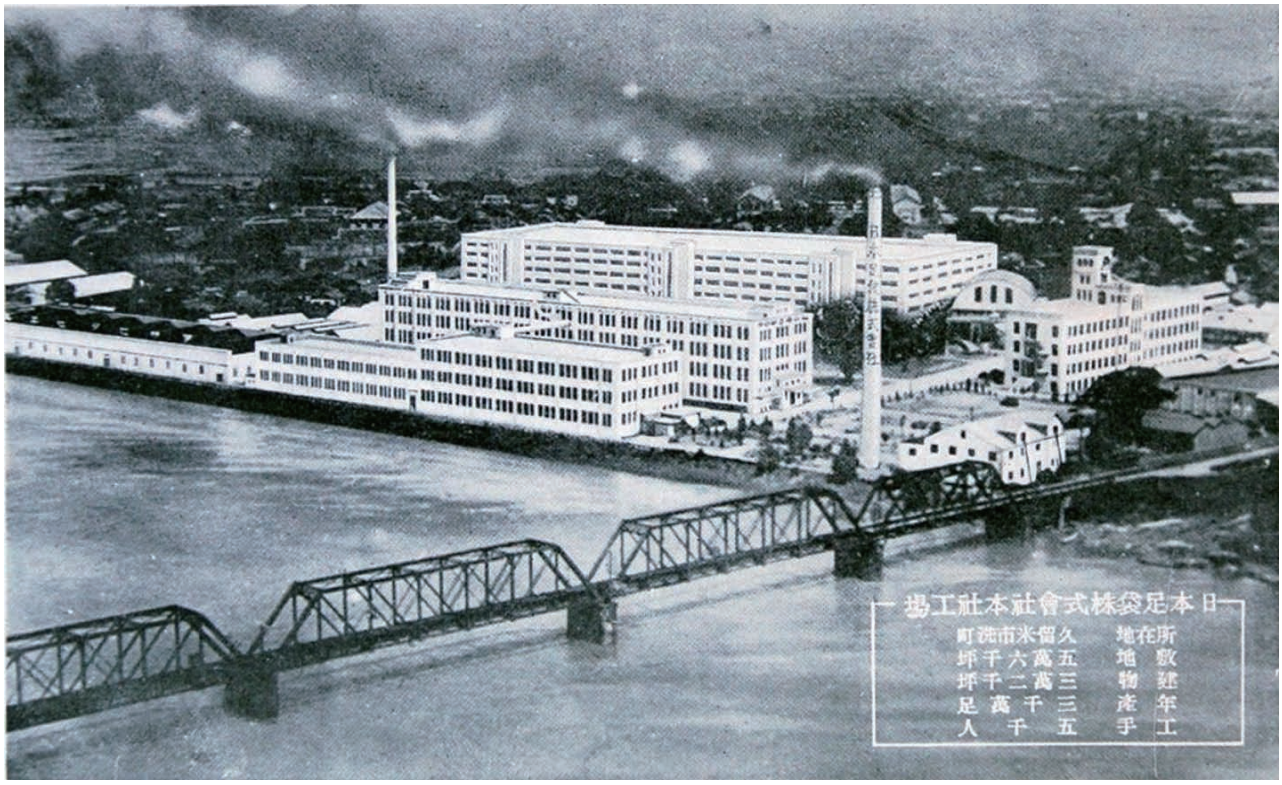
・捕虜と労働

国内産業の近代化を図る日本は、捕虜が持つ高度な知識や技術を役立てるため、積極的に利用しようとしました。捕虜たちにとっても、収容所の外に出て体を動かし、一定の賃金を得ることができる、またとない機会でした。

大正６年（1917）11 月、山砲兵第三大隊で拡張造成工事が始まりました（現久留米商業高校付近）。この工事は久留米第十八師団経理部が陸軍省に願い出て実現したもの。現場監督や、土木技師、専門技術者も捕虜が務めましました。作業内容は、敷地の盛土、土塁用土の採取と運搬、敷地砂利敷きの地均し作業です。一日の労働時間は６時間、延べ人数 13,708 人、実働 94 日で無事完成しました。

「十二軒屋に行った時は、捕虜たちがのどかに、のんびりとトロッコを押しながら働いているのを、朝から見物に出かけました。」（市民の証言）

捕虜にとっても体を動かすことは、大変な気晴らしになったようです。



近代的なゴム地下足袋・ゴム靴生産工場として発展した「日本足袋株式会社」

「ちなみに僕等は、東洋では肉体労働をしないはずの白人だ。しかし日本人が僕らを何週間も散歩に連れて行かなかったので、外での仕事をしたいという欲求が大きかった。中にはほかの人を仕事に行かせてやってお金を稼いだ人もいる。僕等下士官も労働を厭わなかった。（中略）しかしこの楽しみも数ヶ月だけだった。演習場の地ならしが終わってしまったからだ。」（「フィッシャー回想録」生熊文訳）

この他、収容所の測量業務や偕行社（注１）の修繕、師団司令部建物のペンキ塗り替え、連隊の厠建築などを実施。収容所内でも酒保（売店）の販売員や洋食部での調理・販売、理髪、靴の製造に従事しています。

・捕虜の通勤風景

大正７年（1918）９月16日からは、工場・会社での所外労役が始まりました。日本足袋株式会社（現アサヒシューズ株式会社）、つちやたび合名会社（現株式会社ムーンスター）、日本製粉株式会社久留米支店の３社で15名の捕虜が月給24円（うち４円は国庫納入）で雇用され、主に機械の修理、染色や起毛などに従事。また10月以降、この３社でも８名を追加雇用。他にもパン工場や鉄工場、佐賀県鳥栖町の石鹸工場にも就労しました。

「あの頃、一丁田から国分までの軌道が電車に替わりました。日吉神社の所が終点で、捕虜たちは『しまやたび』や『つちやたび』などに電車で通勤していました。それぞれ５～６名位いたと思います。通勤時間帯は普通の人達と同じで、朝８時頃出発し、夕方には帰ってきていました。それぞれのグループごとに衛兵が２人づつ付き、捕虜たちは技術者とし

ブリヂストン創業に偉大な功績を残したヒルシュベルゲルさん

て雇われているとのことでした。彼らはとても愛想が良く、このような通勤風景は何度も目にしました。彼らは収容所の外では薄茶色の軍服を着ていましたが、服はよく洗濯されていて清潔でした。ズボンにはきちんと折り目が入っていて、日本人の紳士よりずっと立派に見えました」（市民の証言）

「ドイツの捕虜の来とったころ、あん人どんが街に行きよっとにどん（軌道や電車で）乗り合はすると、すぐ、席立って、女子供ば掛けさせよった。」（標準語訳：「ドイツ人たちが街に出かけているところに乗り合わせると、すぐ席を立って女性や子供をかけさせていた。」）（真藤ミチヨ「初手物語」）

会社や工場に通勤するため、軌道や電車で通う捕虜たちは、礼儀正しくスマートで紳士的。乗り合わせた市民にも好意的に感じる人が多かったようです。

・ゴム産業の発展に貢献した二人のドイツ兵捕虜

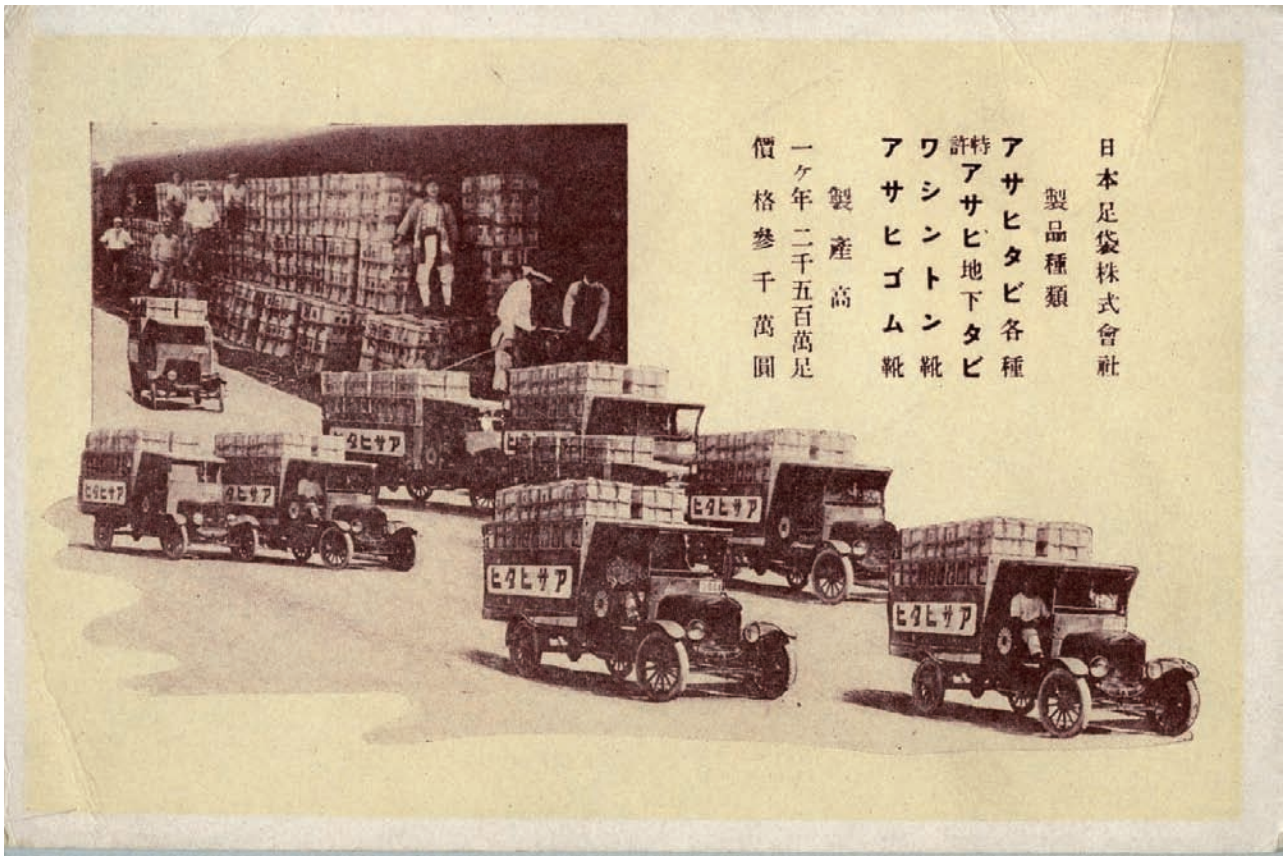
パウル・ヒルシュベルゲル　彼は、日本足袋株式会社でゴム配合を担当した人物です。捕虜解放後の大正 12 年（1923）9 月に同社へ入社。やがてゴム技師長として、地下足袋、ゴム靴やその他のゴム製品の配合研究、工程研究、作業能率研究を行い、日本足袋初期のゴム技術を築き上げました。

昭和 4 年（1929）、日本足袋は自動車タイヤ製造に乗り出します。選抜された従業員約 20 名の中に彼の名前もありました。ヒルシュベルゲルはここで、ゴムの配合関係を担当しました。また、タイヤのブランド名についても彼が関わっています。当初、社長の石橋正二郎の「石橋」を英語読みして「ストーンブリッヂ」との案がありましたが、語呂がよくないというので、石橋とヒルシュベルゲルらは協議の上、逆さまにして「ブリッヂストン」と決定。2 年後、ブリッヂストン株式会社が設立されました。

彼は、日本足袋のゴム技術を確立させた後、我が国の自動車タイヤの創製に大きな役割を果たし、ブリヂストンの創業に偉大な功績を残したのです。

ハインリッヒ・ヴェデキント　戦後の高度経済成長も終盤に近い昭和 46 年（1971）、一人のドイツ人技師が静かにこの世を去りました。彼の名はハインリッヒ・ヴェデキント、82 歳。捕虜時代から「つちやたび合名会社」に雇われ、機械設備改善に取り組んだ人物です。解放後もゴム靴底関係の成形装置の改良をはじめ、裁断機や回転乾燥機など、機械関係の特許の多数が彼の手で完成されたといいます。まさしく、20 世紀前半の同社にとって、その機械技術を支えた功労者の一人なのです。

正式採用後まもなく久留米の女性と結婚、一男二女をもうけ、「ウェデさん」の愛称で



昭和に入るとゴム製品の出荷量は飛躍的に増大する

地元の人々にも親しまれました。久留米を第二の故郷とし、日本名を「上田金蔵」と名乗っています。

「そうですのう、私が日本に残ったわけはのう、科学者としてのじゃけん、良心です。科学にゃじゃん、国境はなかけんのをー。」（「フクニチ新聞」昭和 28 年 10 月 25 日記事）
「ドイツは機械にかけては世界一、日本人の技術は未熟だ。休まれん」
（「フクニチ新聞」昭和 46 年 9 月 23 日記事）

日本に留まったのは、科学技術の先進国が後進国を指導するのは当然のことだから。そして、苦しい時も家族や会社、地域の人々が兄弟のように親切に支えてくれたことが大きかったといいます。死の間際まで「もう一度会社を見たい」といっていたという「ウェデさん」。最後まで機械へ情熱をささげた一生でした。

（注１）帝国陸軍の将校准士官の親睦・互助・学術研究組織。久留米偕行社跡地は現在久留米学園高等学校敷地となっている。